

## タンチョウの繁殖期における利用環境と社会性

新潟大学大学院自然科学研究科

北海道大学大学院地球環境科学研究科

大石 麻美

長谷川 理

北海道に生息するタンチョウの数は、ゆるやかな増加傾向にあり、現在では約600羽に至る。しかし、近年には牧草地などの人工的な環境を生息地として選んだり、他のつがいとかなり近接してなわばりを構えるものが増えており、適した生息環境の不足が心配される。今回の研究の目的はまず、なわばりが隣り合っているつがい同士がどのようにケンカをするのか観察することである。さらに、なわばり防衛行動は、雄と雌のどちらにその役割があるのかはっきりさせることである。タンチョウは普段、雌雄が連れ添って生活するので、雌雄の行動の違いが分かりにくい。抱卵期には雌雄が交代で抱卵するためもう一羽は単独で行動する。今回その抱卵期に調査することで雌雄の行動の違いを観察した。

調査をして分かったことは、隣り合っているつがい同士のケンカは平均約1時間もかかり、非常に長いということである。しかし、相手を直接攻撃するようなことはほとんどなく、はっきりした勝敗もつかない。相手を自分のなわばりに入れさせないように「通せんぼ」するのがねらいではないかと思われる。ケンカの際には雄の方が積極的に相手といがみ合う。雄はさらに、他個体が頻繁に進入する場所をパトロールしたり、普段からなわばり内を広く隅々まで利用することで進入者の発見率を高め、なわばり防衛の役割を担っているようだ。雌も進入者を追い払うが、自分の近辺に限られ、なわばり内を見回ったりはしないようだ。

将来タンチョウの数がもっと増え、さらに生息地の密度が高くなることも考えられる。これからもなわばりを隣接させて暮らすタンチョウの行動を調査し、その生息環境の保護に役立てる必要があるだろう。